

二木 立 著

幻想の「抜本改革」を超えて 21 世紀初頭の医療と介護

藤谷順子（東京都リハビリテーション病院）

わかりやすく頭に知識が入って、かつ元気が出る、
医療関係者必読の好著

なぜ「21 世紀初頭の」か？ それは、科学的に予測できる範囲が 5-10 年だから。どうやって予測するのか？ 近い将来に影響を及ぼす「すでに起きていること」を複眼的に分析することから。

上記のようなコンセプトで、医療改革や介護保険関連で、ここ 1 年半に著者が発表した論文、あるいはインタビュー記事など 13 論文を収録している。それぞれに「分析と予測」が含まれている点は共通しており、個々の論文の発表の場と、想定する読者（看護婦向けのメッセージ、介護福祉士、リハビリテーション科医向けのメッセージもある。）が異なっていたため、焦点が明確で、読みやすくなっている。医療経済学なんて難しいと思われる向きは、ぜひインタビュー記事からお読み頂きたい。

力強いのは、「厚生労働省」や「経済財政諮問会議」などの、「お上」の発言についても、実現できなかったこと、実現の可能性の少ないことに関して、例を挙げて論破している点である。該博な知識に裏付けられたこのような論説と、地道な実証的な研究成果（説得力のある数字）から導き出されるのは、

政策やジャーナリズムに踊らされて目先の保身でうろうろするより、質の高い、国民に必要な仕事をちゃんと行い、「合理的な経営」を行って生き残り、かつきちんと結果を出してアピールしてゆけば、「未来は変えられる」というメッセージである。

とは言え、実状に反した医療費削減が「国是」となりつつあり、黙っているとどんどん「実現」してしまう。また、介護保険導入により国民の状況は好転せず（介護保険推進者が思い描いていた「3つの夢」は破れるべくして破れ）、等々、問題は山積している。抜本的な改革を誰かが考えてくれる（あるいは輸入すればよい）、という「夢」は捨てて、医療関係者として自己改革も含めて少しずつ改善して行くことが重要。そして一方、国民として、自分と家族の未来の為に、へんな政策には NO といい、情報開示などを要求したりしていかなければいけないのだなあ、ということを感じさせる好著であります。「関係者必読」ではなく「国民必読」にしてもいいくらいです。本書を読んだ読者がそれぞれの現場から批判・反論するのもまた、著者の希望するところでしょう。

（四六 頁 308 3,200 円＋税 2001 頸草書房刊）